

困難課題の遂行において自尊心は支えとなるか？

—顕在的・潜在的自尊心のバッファリング効果の検討—¹

稲垣 勉^{1,2} 澤海 崇文^{1,3} 相川 充^{1,4}

¹教育テスト研究センター ²鹿児島大学 ³流通経済大学 ⁴筑波大学

人は、自尊心が脅かされるような困難な課題に直面しても、潜在的自尊心 (Implicit Self-Esteem) が高ければ、それがバッファとして機能するためにネガティブな感情が生じにくいことが先行研究において示されている (Fujii, Sawaumi, & Aikawa, 2014; Greenwald & Farnham, 2000 など)。本研究は、これらの先行研究に基づき、潜在的自尊心のバッファリング効果に関する知見を加えるために検討を行った。また、潜在的自尊心の指標には複数のものが挙げられているため、本研究では3つの潜在的自尊心の指標を取り上げ、それらの相関関係も検討した。62名の大学生・大学院生を対象に実験を行った結果、潜在的自尊心および顕在的自尊心のバッファリング効果と言える結果は見出されなかった。本研究で用いたアナグラム課題が自尊心の脅威として機能したか否かには疑問が残るため、この点を踏まえた再検討が必要と考えられる。また、本研究で取り上げた3つの潜在的自尊心の指標について、その得点の高さは先行研究と一致していたが、各指標間の相関係数はいずれも有意でなかった。

キーワード：自尊心, バッファリング効果, Implicit Association Test, ネームレター課題, 氏名の選好

1. 問題と目的

自尊心 (Self-Esteem; 以下 SE) は、自己に対する肯定的または否定的な態度 (Rosenberg, 1965) と定義され、種々の先行研究において心理的健康に関わる諸指標と関連することが繰り返し示されてきた。たとえば、SE の高さは抑うつ・不安、孤独感などのネガティブな感情とは負の相関がある一方、人生に対する満足感といったポジティブな感情とは正の相関があると報告されている (藤井, 2013, 2014; 伊藤・小玉, 2005)。

1.1 SE の測定方法 従来から SE の測定には自己報告式の尺度 (e.g., Rosenberg, 1965; 山本・松井・山成, 1982 など) が用いられてきたが、近年は内省を伴わない測定法の使用も盛んになっている。このような、自ら意識することが困難な潜在的 SE (Implicit SE; 以下 ISE) の測定法の中で多用されている手法の一つが、Implicit Association Test (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998; 以下 IAT) である。ISE を測定する IAT は、「自己」と「快い」という概念間の連合強度と、「自己」と「不快な」という概念間の連合強度の差を ISE の指標とするものである (手続きについては方法の箇所述べる)。IAT の得点の他にも、ISE の指標にはアルファベットの好みの程度を指標とするネームレター課題 (Name Letter Task; Nuttin, 1985) の得点や、自分の氏名を好む程度を指標とする氏名の選好尺度 (Gebauer,

¹ 本研究は、教育テスト研究センター年報3巻に掲載された「潜在的自尊心のバッファリング効果の検討—困難課題後の感情を指標として— (速報)」および日本社会心理学会第59回大会において発表された「潜在的自尊心を測定する尺度間の相関関係の検討」(いずれも $n = 37$) に新たなデータを加え、再分析を行ったものである。本研究の主題であるバッファリング効果の検討にあたって、中程度の効果量 ($f^2 = 0.15$)、有意水準 0.05 および検定力 0.80 を満たすサンプルサイズは 55 であった。そこで、本研究ではこれを満たすよう 62名のデータを収集した。このデータによる分析結果を最終報告とする。

Riketta, Broemer, & Maio, 2008) の得点などがある。こうした間接的な測定法を用いる研究では、自己報告などによって直接的に測定する SE を顕在的 SE (Explicit SE; 以下 ESE) と呼び、対比させることが多い。

1.2 ISE の機能 潜在的測定法で測定される ISE は、どのような機能を持つのだろうか。先行研究では、自身の SE が脅かされるような事態において ISE はその脅威を低減するバッファ (緩衝材) として機能することが示されている (Fujii et al., 2014; Greenwald & Farnham, 2000; 稲垣(藤井)・大浦・松尾・島・福井, 2017)。このことは、自ら意識することが可能な ESE のみならず、ISE を育む介入プログラムの重要性を示している (原島・小口, 2007)。

先行研究を概観すると、Greenwald & Farnham (2000) は、参加者に 60 名分の氏名が掲載されたリストを提示し、その中から有名人の名前を探してもらうという課題を実施した。リストには 20 名分の有名人の名前が記されているが、難課題群に提示されるリストには、著名な人物の名前に似せた架空の人物の名前も多数記載されており、誤って架空の人たちの名前が有名人の名前であると回答してしまう (すなわち、課題に失敗する) 可能性が高いものであった。

参加者が有名人の名前を同定する作業を終えたのち、正答のリスト (20 個) を提示し、参加者に各自の正解数をカウントしてもらった。この作業を通じて、難課題群と易課題群の参加者は自身のミスの個数を把握できるようになり、特に難課題群の参加者はミスが多いことを自覚することになる。その後、課題の成功の認知や気分 (mood) などを測定する尺度に回答した。一連の分析の結果、課題の重要性の認知 (今回行った課題で測定される能力の重要性の認知) および後続の課題への動機づけ (もう一度同じ課題を行うとしたら、何問正解したいか) に対して、群と ISE (IAT 得点) の交互作用が観察された。難課題群の参加者は、ISE が高いほど課題の重要性の認知が高く、後続の課題に動機づけられていた。特に後続の課題に対する動機づけが高かったことは、高い ISE を持つことによるポジティブな効果と言えるだろう。

また Fujii et al. (2014) は、Greenwald & Farnham (2000) と類似した実験の枠組みを採用しつつ、日常の学習場面に近い実用英語技能検定 (以下、英検) の問題を用いて実験を行った。この研究では、参加者の ESE と ISE を測定したのち、英検の問題を 12 問実施した。難課題群・易課題群に共通して、12 問のうち 4 問は英検準 2 級の問題を使用し、残りの 8 問は難課題群には英検 1 級の問題、易課題群には英検 2 級の問題をそれぞれ使用した。この課題遂行後に測定した「自分は頭が悪い」といったネガティブな達成関連感情である「無能感」に対し、群と ISE (IAT 得点) の交互作用が見られ、難課題群の参加者は ISE が高いほど無能感の得点が低かった。無能感は失敗の原因を能力や適性に求めることで生じやすく、無能感の高さは後続の学習行動を抑制する (奈須, 1990) ことから、ISE が無能感を抑制することは望ましいことと考えられる。

次いで稲垣 (藤井) 他 (2017) は、社会的排斥を受けた際に生起するネガティブな気分に対し、ISE はその生起を抑制する効果があることを報告している。具体的には、サイバースポーツ課題 (Williams, Cheung, & Choi, 2000)²によって社会的排斥を受けた参加者の中でも、ISE (IAT 得点) が高い者は、ISE が低い者と比してネガティブな気分を低く報告し

² サイバースポーツ課題は、ボルトス課題をコンピュータ上で実施できるように Williams et al. (2000) が開発したものである。この課題では、参加者と「他の参加者」2名の3人でボールのパス回しをコンピュータの画面上で行う。参加者には、「他の参加者」2名はインターネットで接続された別の場所から、参加者と同様にコンピュータを用いて接続していると説明されるが、実際に「他の参加者」は存在しない。ボールのパス回しが始めると、初めのうち参加者にもボールが回ってくるものの、途中からは「他の参加者」2名のみボールをやり取りするようになり、参加者は疎外された状態になる。

ていた。このことは、他者から排斥されるという、自身の SE が脅威に曝される状況においても、ISE が高ければ乗り越えることができる可能性を示す結果と考えられる。

このように、ISE の高さは、ネガティブな感情や気分の生起を抑制したり、後続の課題への動機づけを維持したりするなど、自尊心への脅威に対して、いわゆるバッファとして機能することが示されている。ただし、たとえば Fujii et al. (2014) において無能感と同時に測定した後悔や後続課題への動機づけなどにおいては交互作用は見出されず、こうしたバッファリング効果が安定して観察されると言い難い。その背景には、ISE のバッファリング効果を検討している研究が少ないことも原因として考えられることから、知見の蓄積が必要であると思われる。

1.3 本研究の目的 上記を踏まえて、本研究は ISE のバッファリング効果に関する知見を新たに加えることを目的として、SE が脅かされるような困難な課題を経験した際、ISE が高ければネガティブな影響は低減されるのか否かを検討する。

Fujii et al. (2014) では、難課題として英検の問題を使用していたが、多くの参加者が普段から英検（もしくはそれに準ずる）の問題に触れているとは考えにくく、この問題の出来が参加者の SE を脅かすようなものであったかについては議論の余地がある。この点に関連して、Fujii et al. (2014) では、「今回取り組んだ課題が、自身にとってどの程度重要であったか」を問う課題の重要性の認知の得点について、易課題群 ($M = 2.90$) より難課題群 ($M = 2.29$) の方が課題の重要性の認知を低く報告していた。このように、課題の難易度を操作するのみでは、参加者の自我関与を高めるのは難しいと考えられる。また、Fujii et al. (2014) は、実験の中で英語の問題を解くということを事前に参加者に知らせておらず、普段あまり馴染みのない英語の問題を解くことを唐突に告げられた参加者の中には、戸惑ったりやる気を持てなかったりした者もいたかもしれない。

こうした点を踏まえ、本研究では2つの工夫を加えた。まず、課題は英検の問題ではなく、5つの文字を並び替えるアナグラム課題 (e.g., とりはやち, おなゆんき) を使用することにした。その理由は、英検の問題と比して、初見でも「解ける可能性」があると認知されやすく、やる気が出やすいと考えたためである。2つ目の工夫は、課題を実施する前に、当該課題の診断性に関する情報を教示するよう変更した点である。具体的には、課題の実施前に「当該課題の成績は、学業や就職活動における成功と関連がある」という内容を教示し、参加者の自我関与を高めるとともに、失敗時に自尊心に脅威を与えることを期した。

また、本研究では ISE のみならず ESE がバッファとして機能するか否かも検討することとする。Greenwald & Farnham (2000) では、成功の認知（課題後に提示される正答をもとに、自分がどの程度課題に成功したかを評定した値）に対して、群と ESE 尺度の得点の交互作用が見られ、難課題群の参加者において、ESE が高いほど成功の認知が高いことが示された。その他、ESE が高い場合、課題の難易度にかかわらず課題後のポジティブ感情も高いという結果も報告されているが、ISE にはこうした主効果は観察されていない。本研究では、ISE に加えて ESE も測定し、困難な課題を実施した後に生起する感情や、後続課題への動機づけへの影響がみられるか否かを検討することとする。

1.4 補足的な検討 上記に加えて、本研究では ISE の測定指標についても検討を行う。ISE の測定には上述の IAT が用いられることが多いが、先述のとおり、IAT 以外にもネームレター課題や氏名の選好尺度などが使用されることもある。ネームレター課題は、26種類のアルファベットに対する好みの程度を測定し、回答者自身の名前前のイニシャルに含まれるアルファベットの好みと、それ以外のアルファベットの好みの平均値の差得点を ISE の指標とする。このネームレター課題得点と IAT 得点はどちらも安定性を有し (Bosson,

Swann, & Pennebaker, 2000), 多くの先行研究において繰り返し使用されている。

しかし, IAT 得点とネームレター課題得点は, ともに ISE の指標とされているにもかかわらず, 有意な相関を示さないことが繰り返し報告されている (Bosson et al., 2000; Gebauer et al., 2008)。ISE の指標として IAT 得点を用いた研究も, ネームレター課題得点を用いた研究も, 従属変数に対して同様の結果のパターンを示す (e.g., 藤井, 2014; 原島・小口, 2007; Creemers, Scholte, Engels, Prinstein, & Wiers, 2012; 2013) もの, IAT 得点とネームレター課題得点の相関の低さは, 検討すべき課題である。こうした議論を受けて近年, Gebauer et al. (2008) は, 回答者自身の氏名の選好の程度を ISE の指標とすることを提案した。彼らによると, 「自分のフルネームがどの程度好きか」という質問項目への回答と, IAT 得点やネームレター課題得点は, いずれも正相関を示した。すなわち, 回答者自身の氏名の選好尺度は, IAT やネームレター課題を用いて測定する ISE とある程度共通する「全般的な SE (General SE)」を測定していると述べられている。

こうした結果が本邦においても観察されるのであれば, 測定や得点の算出に一定の手間がかかる IAT やネームレター課題ではなく, 氏名の選好の程度を ISE の指標とすることで, その測定が容易になる。また, 複数の ISE の指標を組み合わせて用いることで, 測定誤差の影響を減らすことも可能になるだろう。

そこで本研究では, 参加者に対し IAT, ネームレター課題, 氏名の選好という 3 つの方法を用いて ISE を測定し, それぞれの得点の相関関係についても報告する。ただし, ISE のバッファリング効果の検討にあたっては, 先行研究 (Fujii et al., 2014; Greenwald & Farnham, 2000) と比較するために IAT 得点のみを ISE の指標として分析し, その結果を報告する。

2. 方法

2.1 参加者 九州地方の国立大学に通う大学生・大学院生 62 名 (男性 19 名, 女性 43 名, 平均年齢 20.97 歳, $SD = 1.24$) が実験に参加した。

2.2 材料 本研究では, 以下の材料を用いた。

(a) SE-IAT ISE を測定するため, 藤井・澤海・相川 (2014) および藤井・上淵 (2010) で使用された SE-IAT を使用した。SE-IAT の手続きおよびカテゴリー語・属性語・刺激語を表 1, 2 に示す。

ブロック 1 (カテゴリー弁別課題) では, 画面中央に呈示された刺激語が, 画面の左側, もしくは右側に表示された「自己」と「他者」のターゲット概念のどちらに属するかを分類するよう求めた。この際, 参加者にはそれぞれ左右のターゲット概念に対応する二つのキー (左側に分類する際は「F」キー, 右側に分類する際は「J」キー) を押下して分類するよう求めた。ブロック 2 (属性弁別課題) では, 呈示された「快い—不快な」の属性概念のどちらに属するかを分類を求めた。ブロック 3 (組み合わせ課題 1) およびブロック 4 (組み合わせ課題 2) は, ブロック 1 とブロック 2 を組み合わせた課題に回答を求めた。画面左側に「自己」と「快い」が, 画面右側に「他者」と「不快な」がそれぞれ呈示され, ブロック 1 とブロック 2 において呈示された刺激語の分類を求めた。ブロック 5 (逆カテゴリー弁別課題) では, ブロック 1 の「自己—他者」の位置を逆にした課題への回答を求めた。ブロック 6 (逆組み合わせ課題 1) およびブロック 7 (逆組み合わせ課題 2) は, ブロック 3, 4 とは組み合わせが逆になった課題を実施した。具体的には, 画面左側に「他者」と「快い」が, 画面右側に「自己」と「不快な」がそれぞれ呈示される課題を実施した。また, 組み合わせ課題と逆組み合わせ課題の実施順序は, 参加者ごとにカウンターバランスをとった。

表 1 SE-IAT の手続き (ブロック構成)

ブロック	内容	詳細	試行数
1	カテゴリー	自己－他者	20
2	属性	快い－不快な	20
3	組み合わせ 1	自己+快い－他者+不快な	20
4	組み合わせ 1	自己+快い－他者+不快な	40
5	カテゴリー	他者－自己	20
6	組み合わせ 2	他者+快い－自己+不快な	20
7	組み合わせ 2	他者+快い－自己+不快な	40

表 2 SE-IAT のカテゴリー語・属性語および刺激語³

自己	他者	快い	不快な
自分	友人	うれしい	汚い
自身	知人	幸せな	残忍な
私	他人	気持ちいい	気持ち悪い
我々	知り合い	元気な	苦痛な
わたくし	ともだち	素晴らしい	落ち込む

注) 上段はカテゴリー語および属性語, 下段は刺激語を示す。

(b) ネームレター課題 Nuttin (1985) によって提案された, 実験参加者自身の氏名のイニシャルに含まれるアルファベットの好みの程度を ISE の指標とする尺度である。日本人のイニシャルには含まれないと考えられる L, P, Q, V, X を除いた 21 項目の好みについて, それぞれ 5 件法 (1: とても嫌い—5: とても好き) で回答を求めた。

(c) 氏名の選好尺度 Gebauer et al. (2008) によって提案された, 実験参加者自身の氏名の好みの程度を ISE の指標とする尺度である。当該尺度を翻訳して使用した藤井・澤海・相川 (2016) と同様, 姓の好み, 名前の好み, フルネームの好みについて, 9 件法 (1: とても嫌い—9: とても好き) でそれぞれ回答を求めた。

(d) ESE 尺度 ESE を測定するため, Rosenberg (1965) の 10 項目の尺度を翻訳した山本・松井・山成 (1982) による尺度を用いた。回答は 5 件法 (1: 当てはまらない—5: 当てはまる) で求めた。

(e) アナグラム課題 市村・上田・楠見 (2017) より 20 問 (易課題・難課題 10 問ずつ) を用いた。易課題・難課題の選出にあたっては, 市村他 (2017) で報告されていた解決時間の平均値や主観的困難度を参考にした。

(f) 課題の難易度の認知尺度 アナグラム課題の難易度の認知を測定するために, Fujii et al. (2014) を参考に, 「この課題は難しかった」, 「この課題をよく出来たと思う (逆転)」, 「この課題を, 他の人よりよく出来たと思う (逆転)」の 3 項目からなる尺度を作成し, 5 件法 (1: あてはまらない—5: あてはまる) で回答を求めた。

³ 「快い」および「不快な」の属性に含まれる語のうち「元気な」と「苦痛な」については, 藤井他 (2014) や藤井・上淵 (2010) では「な」が付されておらず, 形容詞または形容動詞の形をとる他の刺激語と統一されていなかった。「自己」「他者」のカテゴリーに含まれる刺激語は全て名詞であるため, これらとの区別をつけやすくすることを期して, 本研究では「元気」および「苦痛」に「な」を付した。

(g) 課題の重要性の認知尺度 アナグラム課題を遂行することが参加者にとってどの程度重要であると認知されていたかを測定するため、Fujii et al. (2014) や Greenwald & Farnham (2000) を参考に、「この課題は、自分にとって重要だと思う」、「この課題は、自分の能力をよく測定していたと思う」、「この課題で測定された能力は、自分にとって重要だと思う」、「この課題を最後まで解くことは、自分にとって重要だと思う」、「この課題を他の人よりもできることは、自分にとって重要だと思う」の5項目からなる尺度を作成し、5件法(1: あてはまらない—5: あてはまる)で回答を求めた。

(h) アナグラム課題の経験尺度 今回の実験で用いたようなアナグラム課題について、「普段から、こうした並び替え課題を解く機会は多い」という項目を作成し、5件法(1: あてはまらない—5: あてはまる)で回答を求めた。

(i) 達成関連感情尺度 アナグラム課題の遂行に伴って生起する達成関連感情を測定するため、奈須・堀野(1991)より「後悔」および「無能感」を測定する項目を3項目ずつ選び、6件法(1: 全くあてはまらない—6: とてもあてはまる)で回答を求めた。

(j) 後続課題への動機づけ尺度 アナグラム課題の遂行後に、どの程度の動機づけを有しているかを測定するため、三和・外山・長峯・湯・相川(2017)の動機づけ尺度を用いた。5項目について5件法(1: 全くあてはまらない—5: とてもあてはまる)で回答を求めた。

(k) 気分尺度 課題遂行に伴って生起する気分を測定するため、佐藤・安田(2001)によるPANASを使用した。ポジティブ気分、ネガティブ気分ともに8項目ずつ、6件法(1: 全くあてはまらない—6: 非常によくあてはまる)で回答を求めた。

2.3 手続き 講義時間等を利用し、実験参加者のリクルートを行った。この際に質問紙を配布し、ネームレター課題および氏名の選好尺度、ESE尺度への回答を求めるとともに、イニシャルおよびメールアドレス、氏名の記入を求めた。参加者のリクルートにあたり、本実験への参加は任意であり、参加しないことによる不利益は一切ないこと、後日に実験への参加意志を撤回しても構わないことを口頭および質問紙の表紙に記載し、実験への参加を希望する者のみ回答するよう求めた。

後日、実験用プログラムへアクセスするためのURLおよびプログラムの実行方法に関する説明を記載したメールにて案内し、PCを用いてSE-IATを含む一連のプログラム(Inquisit Web Licenseで制御)の実行を依頼した。その際、30分程度の間、集中できる静かな環境を確保した上で実験プログラムを遂行するよう求めた。参加者はランダムに易課題群($n=31$)・難課題群($n=31$)のいずれかに割り当てられ、最初にSE-IATを遂行したのち、それぞれ難易度の低い/高いアナグラム課題(1問の制限時間は15秒)を10問遂行した。この際、両群ともに、「当該課題の出来は将来の成功(大学院入試や就職試験での成功)と関連がみられることが確認されている」という旨の教示を行い、自我関与を高めるとともに、失敗した際に自尊心に脅威を与えるよう操作した。続いて、課題の難易度の認知尺度と課題の重要性の認知尺度、アナグラム課題の経験尺度について回答を求めた。その後、達成関連感情尺度、後続課題への動機づけ尺度、気分尺度のそれぞれについて、実施順序をランダムにして提示して回答を求めた。

課題実施後、アナグラム課題実施前に行った教示は事実とは異なるものであったことを説明するWebサイトへリダイレクトし、実験の性質上、こうした教示を行わざるを得なかったことを謝罪した。その後、参加者に個別に連絡を取り、謝礼として図書カード1000円分を送付した。この際にも改めて謝罪を行い、実験の目的について入念な説明を行った。また、希望者には実験結果の概要を後日連絡する旨も伝えた。本実験の所要時間は概ね20分程度であった。

3. 結果

3.1 データの得点化 本研究で用いた尺度について、まず SE-IAT は Greenwald, Nosek, & Banaji (2003) が提唱する D 得点を算出し、IAT 得点とした⁴。次に、尺度が 2 項目以上で構成されるものは以下に示す方法を用いてそれぞれ得点化を行った。ネームレター課題は、姓と名に含まれるアルファベットの選好が有意な正の相関 ($r = .39, p < .01$) を示していたため、両者の平均値を算出した上で、実験参加者自身の氏名に含まれるイニシャルと、含まれないイニシャルの選好の差得点を求め、ネームレター課題得点とした。氏名の選好尺度は、姓、名、およびフルネームの選好に有意な正の相関 ($r_s \geq .32, p_s < .01$) がみられたため、3 項目の平均値を算出し、氏名の選好尺度得点とした ($\alpha = .80$)。ESE 尺度は主成分分析を行ったところ、「もっと自分自身を尊敬できるようになりたい」という項目の主成分負荷量が $-.05$ と低かったため除外し、再度同様の分析を行ったところ、各項目の主成分負荷量は $.41$ 以上であったため、この 9 項目を用いて、逆転項目を処理した上で平均値を算出し、ESE 得点とした ($\alpha = .85$)。課題の難易度の認知尺度は主成分分析を行ったところ、いずれの項目も $.88$ 以上の主成分負荷量を示したため、逆転項目を処理した上で 3 項目の平均値を求め、課題の難易度の認知尺度得点とした ($\alpha = .89$)。課題の重要性の認知尺度は主成分分析を行ったところ、いずれの項目も $.52$ 以上の主成分負荷量を示したため、5 項目の平均値を求めて課題の重要性の認知尺度得点とした ($\alpha = .80$)。達成関連感情尺度は 2 つの下位尺度を想定していたため、因子分析 (最尤法・プロマックス回転) を行ったところ、当初の予測と一致して 2 因子 (各 3 項目) が抽出された。第一因子は「頑張ってもだめなんだと思う」、「自分は頭が悪いと思う」、「自信がなくなった」の 3 項目で構成されていたことから「無能感」と命名して平均値を求め、無能感得点とした ($\alpha = .66$)。第二因子は「頑張ればもっとやれたのと思う」、「もう一度やり直したいと思う」、「もっと頑張ればよかった」の 3 項目で構成されており「後悔」と命名して平均値を求め、後悔得点とした ($\alpha = .68$)。後続課題への動機づけ尺度は主成分分析を行ったところ、いずれの項目も $.82$ 以上の主成分負荷量を示したため、5 項目の平均値を求め、動機づけ得点とした ($\alpha = .93$)。気分尺度は、2 つの下位尺度を想定していたため因子分析 (最尤法・バリマックス回転) を行ったところ、先行研究と一致して 2 因子 (各 8 項目) が抽出された。ただし、3 項目 (きっぱりとした、機敏な、強気な) の因子負荷量は $.40$ に達していなかったことから、これらの 3 項目を除いて同様の因子分析を実施したところ、再度 2 因子が抽出された。第一因子は「おびえた」、「うろたえた」、「びくびくした」といった 8 項目で構成されており、先行研究 (佐藤・安田, 2001) と同様の構造であったことから「ネガティブ気分」と命名して平均値を求め、ネガティブ気分得点とした ($\alpha = .86$)。第二因子は「活気のある」、「気合の入った」、「わくわくした」といった 5 項目で構成されており、先行研究 (佐藤・安田, 2001) と同様の項目で構成されていたため、「ポジティブ気分」と命名して平均値を求め、ポジティブ感情得点とした ($\alpha = .81$)。いずれの尺度も、得点が高いほど当該尺度名の傾向が強いことを示す。

⁴ 脚注 3 で触れたとおり、本研究においては「快い」、「不快な」に含まれる属性語のうち「元気」、「苦痛」に「な」を付して形容動詞化した。こうした点が IAT 得点に影響するか否かを検討するため、IAT 得点の平均値について、これらの語を名詞の形で使用している先行研究 (藤井他, 2014; 藤井・澤田, 2014; 藤井・上淵, 2010; 稲垣・上原, 2018) と比較した。その結果、藤井他 (2014) では 0.60 、藤井・澤田 (2014) では 0.73 、藤井・上淵 (2010) では 0.63 、稲垣・上原 (2018) では 0.69 という値が報告されており、本研究で得られた 0.66 という値は、これらと近似していた。したがって、刺激語を変更したことによる IAT 得点への影響はないと考えられる。

上記の他に単項目で測定した各尺度の得点の記述統計量および相関係数について、全体 ($n = 62$) の場合 (表 3) と、群別 (易課題群, 難課題群ともに $n = 31$; 表 4) に分けて示す。

表 3 各指標間の相関係数および記述統計量 ($n = 62$)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	<i>M</i>	<i>SD</i>
1 ISE(IAT)	—											0.66	0.50
2 ISE (ネームレター課題)	-.22	—										0.95	0.77
3 ISE (氏名の選好)	.10	-.13	—									6.69	1.53
4 ESE	-.05	.03	.15	—								3.32	0.67
5 難易度認知	.07	-.02	.08	-.15	—							3.99	1.14
6 重要性認知	.10	-.01	.15	-.21	-.10	—						3.01	0.85
7 課題の経験	.07	.09	-.15	.02	-.27*	.17	—					1.40	0.71
8 無能感	.09	-.10	.02	-.46**	.62**	.06	-.09	—				3.01	1.00
9 後悔	.18	.11	.02	-.21	.06	.22	-.06	.24	—			3.60	1.07
10 動機づけ	.07	-.04	.09	-.04	-.47**	.44**	.18	-.42**	.33**	—		3.42	0.93
11 ネガティブ気分	.24	-.07	.01	-.45**	.45**	.28*	.01	.61**	.18	-.21	—	3.08	0.96
12 ポジティブ気分	-.02	-.09	.27*	.32*	-.34**	.29*	.18	-.32*	.06	.61**	-.12	3.09	0.92

** $p < .01$, * $p < .05$

表 4 群ごとの各指標間の相関係数および記述統計量 (各群ともに $n = 31$)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	<i>M</i>	<i>SD</i>
1 ISE(IAT)	—	.01	.03	-.01	.03	.10	.24	-.10	.00	.08	.17	-.01	0.63	0.54
2 ISE (ネームレター課題)	-.44*	—	-.03	.09	.27	-.13	.02	-.15	.00	-.17	-.02	-.23	1.05	0.71
3 ISE (氏名の選好)	.15	-.25	—	.13	-.06	.16	-.09	.02	-.02	.14	.16	.37*	6.61	1.53
4 ESE	-.08	-.04	.17	—	-.01	-.26	-.16	-.44*	-.27	-.07	-.31	.41*	3.34	0.69
5 難易度認知	.05	.09	.13	-.34	—	.10	.04	.47**	.00	-.32*	.41*	-.24	3.06	0.83
6 重要性認知	.12	.12	.15	-.17	-.02	—	.20	.02	.34	.49**	.34	.18	3.13	0.75
7 課題の経験	.04	.08	-.17	.08	-.07	.12	—	.07	.13	.17	.43*	.12	1.61	0.88
8 無能感	.26	.06	-.03	-.54**	.65**	.29	.02	—	.20	-.39*	.51**	-.29	2.60	0.84
9 後悔	.35	.23	.08	-.15	.42*	.05	-.21	.46**	—	.43*	.11	.08	3.71	1.06
10 動機づけ	.17	.03	.09	-.03	-.26	.30	.00	-.10	.11	—	-.10	.58**	3.81	0.50
11 ネガティブ気分	.29	-.04	-.17	-.61**	.30	.37*	-.01	.61**	.35	-.06	—	.04	2.76	0.92
12 ポジティブ気分	-.01	.07	.21	.21	-.22	.45*	.13	-.12	-.06	.51**	-.15	—	3.35	0.61
<i>M</i>	0.69	0.85	6.77	3.30	4.91	2.88	1.19	3.41	3.48	3.03	3.40	2.83		
<i>SD</i>	0.47	0.83	1.56	0.67	0.42	0.93	0.40	0.99	1.09	1.09	0.91	1.10		

** $p < .01$, * $p < .05$

注) 表の右上部分および右の 2 列は易課題群の相関係数および記述統計量を、表の左下部分および下の 2 行は難課題群の相関係数および記述統計量をそれぞれ示す。

3.2 操作チェック 易課題群と難課題群との間で、難易度の主観的評定値に差があるか否かを検討するため、課題の難易度の認知尺度得点について 2 群間の平均値の差を検定した。等分散性の仮定が棄却されたため Welch の検定を行ったところ、両群の平均値の差は有意であった ($t(44.58) = 11.09, p < .001, d = 2.78$)。難課題群は、易課題群よりも課題の難易度を高く評定しており、本実験における難易度の操作は有効であったことが確認できた。また、課題の重要性の認知尺度得点について対応のない t 検定を行ったところ、両群の平均値の差は有意ではなく ($t(60) = 1.14, ns., d = 0.29$)、両群ともに同程度であったことを確認した。

3.3 ISE のバッファリング効果の検討 課題の重要性の認知、無能感、後悔、動機づけ、ネガティブ気分、ポジティブ気分の各得点を従属変数とし、群 (易課題・難課題; それぞれ -1 と +1 を割り当てダミー変数化) と IAT 得点および両者の交互作用項を独立変数とした階層的重回帰分析を行った。この際、アナグラム課題の経験尺度の得点を step1 で投入

し統制した。step2 において群・IAT 得点を独立変数として投入し、step3 で両者の交互作用項を投入した。以下、最終ステップである step3 の結果を報告する（表 5）。

表 5 ISE のバッファリング効果の検討（階層的重回帰分析の結果）

独立変数	従属変数					
	ポジティブ気分	ネガティブ気分	動機づけ	後悔	無能感	重要性の認知
課題の経験	.10	.10	.05	-.11	.04	.13
群	-.26	.35 **	-.41 **	-.15	.42 **	-.11
IAT得点	-.02	.21	.09	.17	.04	.10
群×IAT得点	.00	-.05	.01	-.15	-.16	.00
R^2	.09	.17	.19	.08	.20	.05

** $p < .01$

注) いずれも step3 の結果を示す。独立変数の行に記載されている数値は標準化偏回帰係数を示す。以下の 3.4 節の分析においても同様である。

一連の分析の結果、ネガティブ気分、動機づけ、無能感の各得点に対し、群の主効果のみが有意であり、ネガティブ気分および無能感の得点は難課題群の方が高く、動機づけ得点は易課題群の方が高かった。群と IAT 得点の交互作用はいずれも有意ではなかった。

3.4 ESE のバッファリング効果の検討 ESE 得点を用いて 3.3 節と同様の分析を実施した。3.3 節と同様、最終ステップである step3 の結果を報告する（表 6）。

表 6 ESE のバッファリング効果の検討（階層的重回帰分析の結果）

独立変数	従属変数					
	ポジティブ気分	ネガティブ気分	動機づけ	後悔	無能感	重要性の認知
課題の経験	.12	.14	.05	-.11	.05	.13
群	-.25	.34 **	-.39 **	-.11	.39 **	-.09
ESE得点	.32 **	-.44 **	-.05	-.21	-.45 **	-.22
群×ESE得点	.19	.15	-.03	-.08	.00	-.06
R^2	.22	.33	.16	.07	.35	.08

** $p < .01$

一連の分析の結果、ネガティブ気分、動機づけ、無能感の各得点に対し、群の主効果が有意であり、ネガティブ気分および無能感の得点は難課題群の方が高く、動機づけは易課題群の方が高かった。また、ネガティブ気分、無能感の得点に対して ESE 得点の主効果が有意であり、難易度の違いにかかわらず ESE 得点が高いほどネガティブ気分や無能感の得点は低く、ポジティブ気分得点が高かった。群と ESE 得点の交互作用はいずれも有意ではなかった。

3.5 ISE の各指標間の相関 本研究では、ISE の指標として IAT、ネームレター課題、名前の選好尺度という 3 つの得点を使用した。それぞれの相関係数および記述統計量は、

先述の表 3 に示したとおりである。表 3 から、3 つの ISE の指標間の相関係数はいずれも有意でないことがわかる。ただし、IAT 得点と氏名の選好尺度得点との相関関係を検討した稲垣・上原 (2018) では、男女別に分けて相関関係を検討した結果、男性では IAT 得点と氏名の選好尺度得点に有意な正の相関が見られたことを報告している。本研究でもこれにならぬ、ISE の 3 つの指標と ESE 得点について、男女別に相関係数を算出した (表 7)。有意には至っていないが、男性において IAT 得点とネームレター課題得点は負の相関 ($r = -.44, p = .056$), IAT 得点と氏名の選好尺度得点に正の相関 ($r = .39, p = .095$) がみられたほかは、中程度 (0.4 程度) 以上の相関関係を示す組み合わせはなかった。

表 7 男女別の ISE の指標間の相関係数および記述統計量

	1	2	3	4	M	SD
1 ISE(IAT)	—	-.44	.39	-.19	0.61	0.62
2 ISE (ネームレター課題)	-.11	—	.00	.05	1.23	0.63
3 ISE (氏名の選好)	.00	-.25	—	-.08	7.21	1.23
4 ESE	.04	.01	.22	.05	3.37	0.70
	M	0.68	0.82	6.47	3.30	
	SD	0.45	0.81	1.61	0.67	

注) 表の右上部分と右の 2 列は男性 ($n = 19$) の相関係数および記述統計量を、表の左下部分と下の 2 行は女性 ($n = 43$) の相関係数および記述統計量をそれぞれ示す。

続いて、IAT 得点、ネームレター課題得点、氏名の選好尺度得点のそれぞれの平均値について、理論的中央値 (IAT 得点およびネームレター課題得点は 0、氏名の選好尺度得点は 5) からの差について t 検定を行った。その結果、3 つの得点の平均値はともに理論的中央値から有意に正の方向に離れていた ($ts \geq 9.65, ps < .001$)。

4. 考察

4.1 ISE および ESE のバッファリング効果 本研究では、先行研究 (Fujii et al., 2014; Greenwald & Farnham, 2000) と同様に、IAT 得点と群の交互作用を用いて従属変数を予測させたが、取り上げた複数の従属変数に対し、独立変数間の有意な交互作用は見出されなかった。したがって、少なくとも本研究で使用したアナグラム課題を遂行した際に生起する感情や動機づけなどに対しては、ISE のバッファリング効果と見なせるものは観察されなかった。また、IAT 得点の主効果は見出されなかったが、この点は先行研究と一致している。

また、本研究では ESE がバッファとして機能するか否かについても検討を行った。その結果、ESE 得点と群の交互作用の影響は有意ではなく、ポジティブ気分およびネガティブ気分、そして無能感に対する ESE 得点の主効果が有意であった。したがって、課題の難易度にかかわらず、ESE はネガティブな気分や無能感を抑制し、ポジティブ気分を促進することのみ示された。ポジティブな気分が促進されることは Greenwald & Farnham (2000) の結果と一致しているが、彼らの考察と同様に、この結果は ESE の尺度および気分の尺度がいずれも自己肯定的な判断を反映していたと解釈することも可能である。

これらのことから、ISE・ESE とともにバッファとして機能することを支持する証拠は見出されなかったが、その原因として、本研究で使用した「診断性のあるアナグラム課題」を上首尾に遂行できるか否かが、参加者にとって SE の脅威にはなり得なかった可能性が考

えられる。Fujii et al. (2014) で用いられた英検の問題の方が、SE への脅威としてインパクトが強いものだったかもしれない。本研究ではアナグラム課題の実施前に、課題の診断性についての情報を提示し、参加者の自我関与を高めることを期したが、その効果が十分であったか否かは確認していない。仮に課題遂行後にこうした教示を信じていたかを尋ねても、尋ねること自体が誘発する一種の実験者効果によって回答が歪められると思われたため、こうした点は尋ねなかった。

ただし、アナグラム課題の重要性の認知尺度得点については難課題・易課題の両群間で有意な差がみられなかった。すなわち、両群とも今回のアナグラム課題の重要性を同程度にみなしていたと言える。この点は、先行研究 (Fujii et al., 2014) の課題を克服したとみなせるが、評定の平均値は易課題群は 3.13、難課題群は 2.88 であり、両群ともに 5 件法の中点 (3) 付近に留まっており、決して高い値ではない。推察の域を出ないが、Fujii et al. (2014) で使用した英検の課題に、診断性の教示を加えることで、SE への脅威を与える課題としてより適切に機能したのかもしれない。この点は本研究の課題であり、改善すべき点であると言えるだろう。

4.2. ISE の指標間の関係 本研究では、ISE・ESE のバッファリング効果について検討するとともに、ISE の指標である IAT 得点、ネームレター課題得点、氏名の選好尺度得点を同時に取り上げ、それらの得点の様相や相関関係についても検討を行った。

その結果、IAT 得点、ネームレター課題得点、氏名の選好尺度得点の平均値はいずれも理論的中央値を有意に超えていた。それぞれの得点が理論的中央値より有意に高いという結果は、IAT 得点 (藤井・澤田, 2014; 藤井他, 2014)、ネームレター課題得点 (藤井, 2014; Gebauer et al., 2008; 津田・伊藤, 2012)、氏名の選好尺度得点 (Gebauer et al., 2008; 澤海・藤井・相川, 2016; 津村・村田, 2016) のいずれにおいても、共通する特徴として見出されている⁵。本研究において、理論的中央値からの差については先行研究と同様の傾向が観察された。

しかし、ISE の各指標間の相関係数はいずれも有意ではなく、それぞれの指標に正の相関関係を報告した Gebauer et al. (2008) とは一致しない結果になった。また、有意には至らなかったものの、性によって尺度間の相関関係が異なっていた点も注意が必要であろう。ISE の指標間に相関関係がみられなかったことは、複数の解釈が考えられる。まず考えられるのは、いずれかの指標が ISE を「正しく」反映できており、その他の指標が「正しく」反映できていなかったという解釈である。その他にも、いずれの指標も「正しく」ISE を反映できていない可能性や、それぞれの指標が反映している ISE の側面は異なるため、相関が得られないという解釈もありえるだろう。先行研究においては、ISE の各指標が ISE の「どの」部分を反映しているかについては明確な結論は得られていないと思われる。本研究の結果はこの点に一資料を提供するものであると考えるが、ISE の指標間の相関関係を検討するのみでは、それぞれの指標が ISE のどの部分を反映しているのか (あるいは反映していないのか) について論じることはできない。今後は、ISE の各指標がこういった外的指標 (行動や感情など) を予測するのか、という観点からの検討が求められるであろう。

4.3. 結論と今後の課題 本研究の結果をまとめると、まず ISE および ESE のバッファリング効果は見出されなかった。この点は用いた課題による影響なども考えられるため、今後の精査が必要であると考えられる。

⁵ ここで引用した論文の中には、理論的中央値からの検定結果を報告していないものもあるが、各尺度の M と SD およびサンプルサイズが記載されていれば計算可能であるため、必要に応じて計算を行った。

また、ISE の指標となる IAT 得点とネームレター課題得点、氏名の選好尺度の平均値については先行研究と一致する結果が得られたものの、各指標間の相関関係はいずれも有意でなく、その測定対象については今後さらなる検討が必要であろう。

今後は、課題内容および教示を操作することで、さらに参加者の自我関与を高めた上で検討を行うことや、ISE の各指標が関連すると思われる行動や感情などの外的指標に対し、その因果関係を検討することが課題として挙げられる。

5. 参考文献

- Bosson, J. K., Swann, W. B., & Pennebaker, J. W. (2000) Stalking the perfect measure of implicit self-esteem: The blind men and elephant revisited? *Journal of Personality and Social Psychology*, 79:631–643
- Creemers, D. H. M., Scholte, R. H. J., Engels, R. C. M. E., Prinstein, M. J., & Wiers, R. W. (2012) Implicit and explicit self-esteem as concurrent predictors of suicidal ideation, depressive symptoms, and loneliness. *Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry*, 43:638–646
- Creemers, D. H., Scholte, R. H., Engels, R. C., Prinstein, M. J., & Wiers, R. W. (2013) Damaged self-esteem is associated with internalizing problems. *Frontiers in Psychology*, 4:152
- 藤井 勉 (2013) 対人不安 IAT の作成および妥当性・信頼性の検討 パーソナリティ研究, 22: 23–36
- 藤井 勉 (2014) 顕在的・潜在的自尊感情の不一致と抑うつ・不安および内集団ひいきの関連 心理学研究, 85:93–99
- 藤井 勉・澤田 匡人 (2014) 自尊感情とシャーデンフロイデ——潜在連合テストを用いた関連性の検討—— 感情心理学研究, 21:114–123
- Fujii, T., Sawaumi, T., & Aikawa, A. (2014, February) Buffering effects of implicit self-esteem after failure experience: Investigation among Japanese people. *Poster presented at the 15th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology, Texas, USA*, 248
- 藤井 勉・澤海 崇文・相川 充 (2014) 顕在的・潜在的自尊心の不一致と自己愛——自己愛の3下位尺度との関連から—— 感情心理学研究, 21:162–168
- 藤井 勉・澤海 崇文・相川 充 (2016) 新たな潜在的自尊心の測定方法の検討——名前への選好を指標として—— 日本社会心理学会第57回大会発表論文集, 111
- 藤井 勉・上淵 寿 (2010) 紙筆版 IAT を用いた自尊心査定の試み 東京学芸大学紀要総合教育科学系 I, 61:113–120
- Gebauer, J. E., Riketta, M., Broemer, P., & Maio, G. R. (2008) “How much do you like your name?” An implicit measure of global self-esteem. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44:1346–1354
- Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. (2000) Using the Implicit Association Test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79:1022–1038
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998) Measuring individual differences in implicit cognition: The Implicit Association Test. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74:1464–1480
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003) Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85:197–216
- 原島 雅之・小口 孝司 (2007) 顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果 実験社会心理学研究, 47:69–77

- 市村 賢士郎・上田 祥行・楠見 孝 (2017) 清音ひらがな 5 文字のアナグラムデータベースの作成 心理学研究, 88:241-250
- 稲垣 (藤井) 勉・大浦 真一・松尾 和弥・島 義弘・福井 義一 (2017) 顕在的・潜在的自尊心が社会的排斥後の感情に及ぼす影響 九州心理学会第 78 回大会発表論文集, 31
- 稲垣 勉・澤海 崇文・相川 充 (2018) 潜在的自尊心のバッファリング効果の検討——困難課題後の感情を指標として—— 教育テスト研究センター年報, 3:37-39
- 稲垣 勉・上原 依子 (2018) 潜在的自尊心の指標としての「名前の選好」——潜在連合テストとの相関関係からの検討—— 鹿児島大学教育学部研究紀要, 69:143-153
- 伊藤 正哉・小玉 正博 (2005) 自分らしくある感覚 (本来感) と自尊感情が well-being に及ぼす影響の検討 教育心理学研究, 53:74-85
- 三和 秀平・外山 美樹・長峯 聖人・湯 立・相川 充 (2017) 制御焦点の違いが上方比較後の動機づけおよびパフォーマンスに与える影響 教育心理学研究, 65:489-500
- 奈須 正裕 (1990) 学業達成場面における原因帰属, 感情, 学習行動の関係 教育心理学研究, 38:17-25
- 奈須 正裕・堀野 緑 (1991) 原因帰属と達成関連感情 教育心理学研究, 39:332-340
- Nuttin, J. M., Jr. (1985) Narcissism beyond Gestalt and awareness: The name letter effect. *European Journal of Social Psychology*, 15:353-361
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 佐藤 徳・安田 朝子 (2001) 日本語版 PANAS の作成 性格心理学研究, 9:138-139
- 澤海 崇文・藤井 勉・相川 充 (2016) 氏名の選好は自尊心の間接的な測定法として有効か? ——諸特性との関連に基づいた妥当性の検討—— 教育テスト研究センター年報, 1:28-30
- 澤海 崇文・稲垣 勉・相川 充 (2018) 潜在的自尊心を測定する尺度間の相関関係の検討 日本社会心理学会第 59 回大会発表論文集, 216
- 津田 恭充・伊藤 義美 (2012) 潜在的自尊心および顕在的自尊心とパラノイア——イニシャル選好課題と星座選好課題を用いた検討—— 対人社会心理学研究, 12:103-109
- 津村 健太・村田 光二 (2016) 潜在的エゴティズムが対人魅力に与える影響——潜在的自尊心による調整効果の検討—— パーソナリティ研究, 24:215-217
- Williams, K. D., Cheung, C. K. T., & Choi, W. (2000) Cyberostracism: Effects of being ignored over the Internet. *Journal of personality and social psychology*, 79:748-762
- 山本 真理子・松井 豊・山成 由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30:64-68

